#　夜の街を歩くのが好きだ。

我喜欢走在夜晚的街道上。

#　知っている人がいない街をクラゲみたいにふわふわと漂っていると、いつもと違う、誰の目も気にしない私でいられるような気がして。カラフルなネオンのなかを歩いているだけで、なんだか自分まで、輝いた存在になれたような気がして。

就这样像水母一样在陌生的街道上飘荡。只有这时，我才感到自己能不像平时那样在意别人的目光。尽管我只是从那些流动着光线的霓虹灯牌旁走过，我却没来由地感到自己也在变得闪耀。

#　秋の温度に変わった十月のはいつもよりも透明で、たんた、らんた、と無意味にステップを踏んで歩く私の足音が、冷えたコンクリートに澄んで響く。どうやら今日の私はまあまあご機嫌みたいで、ぽーんと飛び出すみたいに縁石を飛び越えると、いつもは登らないを登りはじめた。

入秋后气温转寒的十月的涩谷变得比往常通透了些。我漫无目的地踩过台阶时，留下的踢踢踏踏的脚步声在混凝土之间回荡。

#　夜の十時。たぶんこの法治国家日本、十六歳の女子高生が歩くにはそろそろ遅すぎる時間になってきたけれど、こうして自分じゃない自分になる時間が、私には必要だった。

晚十点。即使在日本这个法治国家，十六岁的女子高中生也不该到了这个钟点还在外面闲逛。不过，我非常需要这么一段能让我变得不是自己的时间。

#　回遊魚みたいにしなく進む人の波が、私のことなんて存在しないみたいに横を素通りしていくのが心地いい。年齢も性別も、好きな色も初恋の人の名前も触られたらくすぐったいところまでなにもかも違うのに、一人一人がおんなじ水の粒子みたいに流れを作っているのが、なんだかちょっとかわいく見えた。ほら、あそこでにしわを寄せて歩いてる、頭にり込みを入れたイカついおじさんも、今度はほら、向こうで青いトラックジャケットを着て自信満々に歩いてる、令和ですね～って感じの金髪少女も、交ざってしまえば水の流れとおんなじだ。流れに乗るように、私は人の海を漂っていた。

人流像洄游的鱼群一样从我身边毫不顾忌地匆匆划过，我很享受无人在意自己的这一刻。大家的年龄、性别，乃至于喜欢的颜色、初恋的人的名字这样心中的弱处都不尽相同，但在这一刻却仿佛化作相同的水分子，融入于人流之中，实在是惹人喜欢。你看，那边那个皱着眉头严肃地走着的光头大叔，还有对面那个打扮成令和风格，穿着蓝色运动夹克，自信满满地走着的金发少女，他们走入人群，便成为了人流的一部分。我就这样，乘着人海中的洋流飘荡。

#　コテでふんわりと内巻きにした毛先を、夜風が揺らす。世界にむために選ばれた無難なデザインのスカートのが、くらりと舞った。私はあなたの世界を害しませんよ、だからあなたも私を刺さないでくださいね。徹底受け身な主張に満ちた消極的なファッションこそが、私の戦闘服なのだ。

用卷发棒卷向内侧的蓬松发梢被晚风吹动。为了融入世界而选择的朴素短裙也开始一起飘动。我不会伤害你的世界，所以也不要针对我。将被动贯彻到底的消极打扮，就是我的战斗服。

#『──クラゲという生き物は、自分で泳ぐことができません』

『──水母这种生物，其实无法自主地游动』

#　小学四年生のとき、水族館で聞いた飼育員さんの説明を、私はときどき思い出す。

我时不时会想起小学四年级的时候，在水族馆听到的饲养员的这句讲解。

#『自分の意志もなく、水に流されて漂ってるだけなんですね』

『它们没有自己的意志，只是顺着水流四处飘荡而已』

#　直感的に。

直觉告诉我。

#　私ってクラゲに似てるなあと思った。

我就很像那些水母。

#『太陽が届かない海の底では、光を反射することもできない、い生き物なんです』

『在阳光无法到达的海底，自然也无法反射阳光。它们就是一种这样的脆弱的生命』

#　自分で泳げなくて、流されてばっかりで。

不是自己在游动，只随着波浪飘动。

#　特別になってキラキラ輝くなんて、もってのほかで。

变得特别或惹人注目，都毫无意义。

#　だけどなんだか憎めないと思ったのは、漂う私がクラゲに似ていると思ったからで。

但我却对这些谈不上厌恶，大概是因为我本就像水母一样吧。

#『ですが、クラゲという生き物は、とてもすごい特徴を持っているんです。それは──っ！』

『但是，水母这种生物，有一个非常特别的特点。那就是——！』

#　そして──私がクラゲに似ているといいな。

于是——我能像水母一样真好。

#　そんなことを思えた、きっかけでもあったのだ。

就是这个契机，让我产生了这样的想法。

#

#